
吸血鬼に咬まれても痛くないって言うけれど

みもこちと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼に咬まれても痛くないって言うけれど

【Nコード】

N6725T

【作者名】

みもこちと

【あらすじ】

田中那智^{たなか なち}は逃げだそうとしていた。目の前には倒れた幼なじみ。姿は血まみれ。死んでるの？生きてるの？ああ、とにかく逃げないと！

嘘らしいと那智は思う

目の前には倒れた男子。

首は血で真っ赤に染まっでいて、指先一つ動かさない。

私は口を抑えて後ろへ一歩下がった。

ドン、と教室の壁に当たる。

そうだ行き止まりだった。

急いで出入り口を探すが、慌て過ぎて床に転がっていた筈につまづいてしまう。

固い平面に鼻をぶつけた。

盛大に転んだせいか足首が痛い。

なんで私っていつもこう・・・。

あまりの情けなさに泣き出したい気持ちで私は今日のことを思い出した。

私、田中那智^{たなか なち}は先生に第二視聴覚室の掃除を任されて放課後遅くまで残っていた。

そう大くない部屋ということで同級生の谷崎健太^{たにざき けんた}と二人で。

彼とはケンちゃん、那智と呼び合ういわゆる幼なじみな仲だったのだが、最近あまり話す機会がなかった。
なので必要以上の会話もなく黙々と掃除を続けていた。

外が赤くなつた頃、部屋の隅でチリトリでゴミを集め終わり、立ち上がった瞬間、頭がくらくとした。

手に持っていた箒とチリトリが音を立てて落ちる。

貧血だった。

実は私は最近ずっと貧血気味であつた。

立ち上がれば倒れそうになるし、走った後はふらふらする。

昔から貧血の傾向はあつたが、高校二年生になつてからは更に酷くなった。

その時は特に酷かつたようで揺れる視界のまま倒れそうになつたところ、ケンちゃんに支えられた。

「おい！？大丈夫か？」

答えられず無言で見上げるとケンちゃんの顔が赤くなつた。

不思議に思つてると肩を支えていた手に力が込められ壁に寄せられた。

「那智、俺は・・・」

ケンちゃんが切羽詰まつた声で何かを言おうとしていたのだが、私はそれどころではなかった。

なぜかはわからない密着に身長差のせいで、私の視界を覆ったのは彼の肌色の首だった。

掃除のために学ランを脱いでいたので、上のボタンを二つくらい外した白シャツからのぞいていたのだ。

心臓の鼓動が早くなり、喉が乾く。

貧血が悪化した気がして、何か言っているらしいケンちゃんの首に手を伸ばた。

息を詰める音を聞きながら、抱き寄せ、そのまま首に噛みついた。

あっさり溢れた血に驚きながらも、噛んで舐めてすすった。

「・・・っだ！？ま、なちっ！」

制止のようなケンちゃんの声が聞こえたけど私は止まらず、血を飲んだ。

「・・・ってえ・・・っつ！！！！」

私って吸血鬼だったのかなあなんて思いながら、でもはじめての血はおいしくてたまらなかった。

「・・・・・・・・っつっ！！！」

思う存分飲んで私が我にかえた時、ケンちゃんはもう声もだせないようだった。

「ケンちゃん？」

流石に怖くなって声をかけるとケンちゃんの身体は力なく床に倒れた。

そして、今に至る。

右側にケンちゃんの黒い足が見えて私は状況を思い出した。

考えてる場合じゃない、早く逃げなきゃ！

もう気分は犯罪者だ。

あながち間違ってもない。

逃げてどうにかなるわけでもなかったが、とにかく走ろうと私は身体を持ち上げて、もう一度こけた。

「なんつで・・・！？」

身体を曲げて足の方を見る。
黒い瞳と目が合った。

「ケンちゃん！」

ケンちゃんの手は私の足首をがっちり掴んでいた。
ひどい。通りで転んだわけだ。

ああ、でも、死んでなくて良かった！

私が喜びに目を輝かせるとケンちゃんは視線を外さないまま言った。

「下着、見えてる」

・・・下着？

ケンちゃんの視線は心持ち私の顔より下を向いていて、あ。

「ッギャー！！！」

太ももよりかなり上にたくしあがっていたスカートを両手でおさえ込む。

思わず自由な方の足でケンちゃんの顔を蹴ろうとしてしまったのだが、そっちも手で掴まれて止められた。

「は、はなして！」

言ったらあっさり離してくれた。

だが、手の代わりにケンちゃんの曲げた膝が私の太ももの上に乗っかる。

いつの間にやらケンちゃんは身体を起こしていた。

足の重しをどこそうと両手で押すと、ケンちゃんの片手でまとめられた。

「なんで逃げるんだ」

言いながらケンちゃんは私を引っ張って近づける。

そんな彼の首からはいまだ新鮮な血が流れ、白いシャツを赤く染め上げている。

ひええスプラッタだよ！

「ケンちゃん血みどろで怖い！！」

「はあ！？誰のせいだ！！」

私のせいです。はい。

申し訳なさに身体を縮める。

自分がつけてしまった傷を直視できないながらも、ケンちゃんに顔を合わせて、おずおずと聞いた。

「い、痛い？」

「すっげえ痛い」

だよ、私が噛んでる間ずっと唸ってたもんね・・・！

ケンちゃんの目は極めて剣呑だ。

不機嫌に言葉を続ける。

「死ぬかと思うほど痛かった。なのに誰かさんは人の傷口を容赦なく舐めてきた」

怒りの理由はごもつともなのだが、顔が怖すぎて涙が滲んできた。

「泣くのか、泣きたいのは俺の方だ。まだ血、止まってねーみたいで首が熱いわ、貧血になったのかさっきから頭がクラクラするわ」

「ごめ、ごめんなさ」
「だから」

息がかかるほどに顔が近づく。

「仕返しさせる」

怖い言葉に思わず目をつむると、口に暖かな感触が重なった。

鉄臭い、とケンちゃんが呟いた振動が伝わる。

これキス？キスが仕返し？
痛くなかったよ？

呆然としているうちに、ケンちゃんの頭は私の首に移動したようで
耳に髪の毛の感触を感じた。

恐る恐る目を開けて見えたのは、
あかい、あかい血。

さっきまで直視できなかったのに、目の前にさあとはかりに差し出
されるともう何も考えられない。

ケンちゃんは私の首を舐めたり噛んだりしてるようだったが意識の
端にもものぼらない。

血しかうつらない。

でも今噛んだらダメだね、たぶん。

なんて思いながらも耐えきれなくなつて、でも美味しそうな血を舐めるだけにとどめたのに、ケンちゃんから怒鳴られた。

煽んな、つて、え？

両手が掴まれたまま私の頭の上に移動して壁に押し付けられて、え、あ、ぎゃああああ！

私が噛んだのより痛いんじゃないのかって目に合わされた。

怒ってひどいひどいって叩くと妥当だろって言われた。

「俺は那智と違ってやり逃げしねーよ」

「殺り逃げなんかしてない！ケンちゃん生きてたよ！」

意味が違つと頭にチョップされた。

帰り道に二人でだるだと歩いてたら、思い出したように聞かれた。

「那智つて、吸血鬼なのか？」

今さらな質問にいくら私でも啞然としてしまった。

自分でもよくわからない説明をして、ケンちゃんの出した答えはこうだった。

「わからんが、わかった。とにかくお前は俺以外から血とるなよ」

なんで限定？とは思ったがそれ以上に気になることが。

「これからも血くれるの？」

ケンちゃんは怒った顔をした。

「そうしねーと他の奴襲うんだろ」

確かに今は血を飲んだせいか大分楽になってるが、いつさっきの状態になるかわからない。

「でもケンちゃん痛いんじゃない」

「すつつつげー痛いが我慢してやる」

私は嬉しくなって思わずケンちゃんに抱きついた。

ケンちゃんの顔は真っ赤になる。

「じゃあ今ちょーだい！」

「それが狙いか！！」

怒って引つ剥がされた。

くれるって言ったのに・・・！

「痛いから今日はもう嫌だ」

なんて言われてしまった。

はあ吸血鬼に咬まれても痛くないって嘘だったんだね・・・。

嘘らしいと那智は思う（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

よく吸血鬼の牙には痛みを感じなくする麻酔のような成分があるって聞くけど、なかったら相当痛い気がすると思ってできた話です。

二人とも吸血鬼についてスルーし過ぎで本当に現代人か？と思いつながら書きました。

嘘だったと健太は言う

首が痛い。

心臓が首に移ったんじゃないのってぐらいドクドクいつてる。

しかも麻痺したのか慣れたのかわからないがうつすら痛くなくなってきた。

これアドレナリンがどうのこうのって奴じゃないのか？やばくないか？

俺の目の前には恐る恐るといった様子で見上げる幼なじみがいる。

痛みの元凶、とは言い過ぎか。

なにせ引き金を引いたのは俺のようなのだから。

田中那智とは保育園からの幼なじみだ。

例によって彼女をいじめから守ったりして結婚の約束なんてものをして、例の如く中学校辺りから疎遠になった。

ここらへんは思い出すとのたうち回りたくなるので割愛。

そして実は狙って同じ高校へ行き、念願叶って二年で同じクラスになった。

そこではじめて知ったのは那智は結構もてるということ。ひっそり

とだが。

彼女の容姿は悪くはないが良くもない、性格も人見知り気味、スタイルはボリウムがちょっと足らなくね？ぐらいが周りの認識だと思っていた俺は非常に驚いた。

しかも彼氏がいる、とか。

ショックを受ける権利はないと思いつつもへこんで、どうにか本人から真実を聞きたいと考えた。

そして絶好のチャンスが訪れた。

昔から田中と谷崎の名字には助けられてきたが、今日、日直で良かった。ジョージ（先生のあだ名）がなんとなく掃除押し付けてきてくれて良かった！

しかし話しかけるタイミングもつかめず時間だけが過ぎていって、掃除も終わって頃にいきなり那智が倒れかけた。

驚きながらも駆け寄って支える。

幼い頃に触ったのはもう記憶の彼方で、はじめてに近い彼女の感触はとてもやわらかく感じた。

大丈夫か聞いたが那智は俺にもたれかかったまま、何も答えず、顔をあげる。

そんな潤んだ目で見上げるなー！

思わず両肩を掴んで壁に軽く軽くと念じながら押し付けた。

あれ以上密着してたらどうなるかわからなかった。俺の理性とか。

しかしそんな気遣いも後で彼女によって無用にされてしまうのだが。

とにかく目的であった話をしてしまおうと俺は口を開いた。

「那智、俺は・・・お前に今つき合ってる奴がいるって聞いた。本当か？」

彼女は答えない。

ただじーっとこちらを見上げてくる。

さつきより目の潤みが増しているのは気のせいか？

「なんで何も言わないんだよ。あ、いや、責めてるわけじゃなくて俺だってそんなこと聞き出す権利なんかないのはわかってる。けど、俺は、」

那智の舌が小さく動いて、乾いた唇を湿らすように舐める。
なんか舌なめずりっぽい・・・？
いやいやまさか。

勢いに乗って言った。

「お前が、那智が、好きだ！」

直後に細い手が伸びてきて那智が俺を抱き寄せた。
シャンプーの香りが前面に広がる。

驚いて口を開く前に、首に焼け付くような熱が襲った。

「・・・っだ!？」

噛ま噛ま噛まれてる！？

熱さの次は明確な痛み。

生存本能なのか思い切り彼女を突き飛ばしたくなる気持ちを必死で抑える。

那智の後ろは壁、男の力で押したりなんかしたらどうなるか。それ以上に女に暴力なんて男としてどうかと、でも痛い。

噛む次は舐めてきた。

ぺろぺろなんてレベルじゃねーからな傷に舌ねじ込む勢いだからな！いた、いたた。

だが噛まれた直後よりは幾分、落ち着いて状況を把握できるようになった。

俺の鎖骨あたりには何か柔らかいものが押し付けられていて、意外と着痩せするタイプとかなぜか俺の足の間に入り込んでいる白い太ももとか、つて全然冷静じゃねー！！！！

馬鹿か俺は！

状況を確認した方がもつとやばいことに気づいた。

那智をどうにか視界に入れれば、見たことない恍惚とした表情で俺の血を啜っている。

本気で血飲んでののか・・・！

耳に直接響く水音が生々しい。

貧血なのか頭がくらくらする。

しかし、俺はろくな抵抗もできないままされるがままになっていた。

どのくらい時間が経ったのだろうか。

一日と言われても驚かないくらい、身体が疲弊している。

那智はようやく落ち着いてきたのか俺の首から顔を外したようだった。

首が熱いのに寒いという奇妙な感覚に襲われる。

「ケンちゃん？」

心配気な那智の声を聞きながら、俺の視界はゆるく暗転した。

そして今に至る。

俺は今まさに逃げようとしていた那智を捕まえていた。

目が覚めたらパンツ丸見えでずっこけてんの見つけたただけなんだけどね、咄嗟に足を掴んだ俺、頑張った。

うまいこと慌ててくれたので、簡単に拘束して動けなくする。

那智は今にも捕食されそうな小動物の瞳で見てる。

被害者は俺のはずなのになんでそんな怯えられなければいけないのか。

端から見たら確かに俺が食いそうだが、逆だからな！

本当の肉食は那智の方だからな！

目の前にある那智の唇は口紅では有り得ない赤で光っていた。なんだこの色気。

仕返しなんて本気半分建て前半分で言いながらキスをした。

初恋相手との初キスは血の味ってなんつーおどろおどろしい状況だと思いつつ、首を辿って軽めにやり返していると、那智が俺の首を舐めた。

さっきのように舌をねじ込む感じではなく、遠慮したようにおずおずと。

背筋を走る寒気って、いうか、もう止めないからな。

半泣きで俺を叩いてくる那智はちゃんとはじめてでした。

男には一生わからんが、たぶん同じ、下手すると俺が受けた以上の痛みを那智に与えたらしいことに喜びを感じる。

俺はサドじゃなかったはずなのだが。

ひどいと言うので反論してやった。

「俺は那智と違ってやり逃げしねーよ」

男に抱きついてあんな顔で人の首（正しくは血）舐めて煽った挙げ句に逃げようとしたのは那智だ。

「殺り逃げなんかしてない！ケンちゃん生きてたよ！」

殺したつもりだったのかお前――！！

しかもやるの意味が違う！

憤慨する那智の頭に俺は思わずチョップをしてしまった。

いつの間にか首の血は止まっていた。

止血した覚えはないのに。

まあ、いいかと学ランを着る。

きつちり留めれば血みどろシャツも隠れるので助かった。

しかしこの猟期殺人の後みたいなのなシャツはどう洗濯すればいいのか。
下手に家族に見つかったらやばくね？

悩んでると、那智が物欲しそうにこっちを正確にはシャツの血部分を見ていた。

やっぱり捨てよう。

那智と二人で帰った。

お互い疲れ果てていたため自然と歩みが遅くなる。

ここでやっとな俺は那智が吸血鬼というものなのかと思った。
聞いてみたら今さら？と言いたげな顔をされる。

仕方ないだろ。それ以上に重要なことがあったんだから。

要領を得ない説明によると、とにかく那智が人の血を吸ったのは俺
がはじめてだったとわかった。
思ってた以上に安心する。

あんな接触を誰かにさせて、あんな顔を誰にも見せるくらいなら、
俺は痛みぐらい我慢できる。

伝えると那智が嬉しそうに抱きついてきた。
思わず顔が熱くなる。

「じゃあ今ちよーだい！」

「それが狙いか!!」

身の危険を感じて那智を引っ剥がす。

不服そうな彼女がかわいく見えるのだから俺は末期だと思った。

嘘だったと健太は言う（後書き）

終わりです！

読んでいただきありがとうございます！

那智は血しか見てなくて健太は那智しか見てませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6725t/>

吸血鬼に咬まれても痛くないって言うけれど

2011年5月31日21時13分発行